

## ロシア語母語話者のある教育観 協働をいかにすすめるか

—— トウルヒーン論文に寄せて ——

小林 潔

キーワード：ロシア語教育 ネイティブ教員 協働

いわゆる異言語教育——ある言語をその言語を母語としない者（非母語話者）に教育する——にあたっては、母語話者教員と（学習者と母語を同じくする）非母語話者教員との協働が不可欠である（少なくとも教育効果は高い）。我々の場合だと、ロシア語ネイティブ教員と日本人教員とが協働して日本人学習者を相手にするということだ<sup>1</sup>。日本の教育機関でロシア語を講じるロシア人は高等教育を受けた一定以上の素養がある人で、十分に優秀で、それなりに日本の教育現場の事情に通じ、経験もある。人間的にも優れ、熱意もあり、日本人学習者に真摯に接している。だが、ロシア人教員が優れたインテリであるとはいえ、彼ら全てがロシア語教育を専門として学んだわけではないし、ロシア語教師を職業として選んだわけでもない。もちろん、ロシア語教育（РКИ: русский язык как иностранный）のスペシャリストはいて日本の教育界に多大な貢献をしているが、何らかの事情で日本にいるので母語話者の強みを活かし、「報酬を得るため」とか「ついでに」ロシア語を教えているロシア人教員もいるのである。これは非難しているのではない。彼らが日本人学生のためになっているのなら、どのような事情でロシア語教員をしているかはどうでも良いことである。ただし、日本の教育界の事情を単に知らなかったり、自身がインテリであるが故に日本人学習者に過度の要求をしたりすることもあるのではないか。大事なのはロシア人教員と日本人教員との意思疎通で、そのためにはロシア人教員の考えを踏まえておく必要がある。

本章では、あるロシア人の論文（エッセイ）を示す。そして、日本人教師の立場からそのポイントを検証する。こうした作業によって、ロシア語ネイティブ教員と日本人教員の協働について考えてみたい。

以下に示すエッセイの著者ミハイル＝トウルヒーン氏は1976年生まれ、モスクワ州出身。専門は人口学で、モスクワ大学と早稲田大学で博士号を取得している。ロシア語教育に関しては、東京外国語大学ロシア語モジュール制作の協力者であり、スキットに出演もしている。教育体験もある。日本語ロシア語双方に通じるロシアのインテリだが、РКИを特に学んだというわけではない。エッセイでは、日本のロシア語教育の体験に基づいて、どの

<sup>1</sup> 煩雑をさけるべく以下単に「ロシア人」「日本人」とするが、もちろん、言語・民族・国籍は必ずしも等号で結ばれるものではない。

堤正典・小林潔編『ロシア語学とロシア語教育Ⅲ』神奈川大学ユーラシア研究センター、2011年、pp.81-86.  
Masanori TSUTSUMI and Kiyoshi KOBAYASHI (eds.) *Russian Linguistics and Language Education*. III.  
Yokohama: The Eurasia Research Centre Kanagawa University, 2011, pp.81-86.

ようなことを考えているかを書いてもらった。

トゥルヒーン論文はインテリの直観を示したものであり、その指摘はもっともである。正当であるが故にありふれた指摘とみる向きもあろう。エッセイでは既に種々のメソッドがあるだろうことを踏まえた上で「補い」を提案するとしている。

彼の結論から見てみよう（直訳ではなく大意を述べる）。

- ・日本人学習者が出会す困難さの提示・分析（発音、語彙、文法ど）
- ・インターネットスラングへの教育での配慮
- ・標準語を学ぶ上でのインターネット利用の制限や慎重な利用
- ・〔文学作品、特に〕ツルゲーネフ作品の利用

まず、発音である。現代の生活に標準発音が求められることはつとにシチュエルバ (Щерба Л.В.1880-1944)も指摘していることである（シチュエルバ 2008: 32）。日本人がオーカニエで喋ったところでロシア人に通じぬわけはあるまい。しかし、それは随分滑稽に受け取られるようであるし、標準発音を覚えていないということなのでロシア人の発音を聞き取る障碍にもなるだろう。発音の練習は重要なのである。トゥルヒーン氏が感じた発音、力点の問題はその通りなのであろう（子音・母音の不正確な発音、無力点母音の発音、力点の誤りなど）。日本人教員だけが担当するのであってもきちんとロシア語を習った教師が教える場ではあり得ないと思われる話ではあるが、現に学習者の発音に問題を感じるネイティブがいる以上、留意をしなければならぬ事柄である。

語彙に関しては、例えば P. Nation に従えば 1つの語に関して 18の面（下位分類）があるという。すなわち、形（音声、綴り、語の構成）、意味（形と意味、概念、連想）、使い方（文法、コロケーション、使用の制限）のそれぞれで受容的もしくは産出的な知識ということである<sup>2</sup>。ここでトゥルヒーン氏が問題として特記しているのは「使い方」についてだと言える。彼は、避けるべきものと模範とすべきものとを分けている。

避けるべきものであり、かつ「新しい傾向と諸問題」としてインターネットスラングを挙げている。これは重要な指摘である。最近、領土問題等で日露関係が悪化したとはいえロシアに行くことはもはや特段のイベントではないし、ICT（情報コミュニケーション技術）の発達もあって、現実でも仮想空間でも接触面が拡大している。また、いままで（ロシアにとっての）外人には隠されていたロシア語が表に出てきているし、ロシア語そのものも変化している。日本にあってもロシア語は既にいわゆる「2ちゃんねる」等での話題である。学習者はロシアに関心を持てば持つほど、そうしたロシア語とロシア語情報を、つまりスラングを耳で聞き覚えたり、ネットで見たりする。「こう言う時にこう言っていた」という不確かな証言をネットで知る。一方で、学習者の少なさから業界の規模が小さく適切な情報への簡便なアクセスは与えられていない（英語などでは、学習者も、スラングが

<sup>2</sup> ここでは望月(2008:2)に従って示す。

あることはわきまえているだろうし、当該語がスラングかどうか容易に調べがつかうだろう)。そもそも非ネイティブ話者にはある語なり用法なりの文体的判断ができない。当該の語の歴史的な脈でのコンテキストがどうかということも本当の意味では分からないであろう。これは教養あるネイティブの言を信じるしかないのである。日本でのネット用語の現状を鑑みてもトゥルヒーン氏が言うようにネットでのロシア語には警戒することが無難である。

一方でトゥルヒーン氏は(この辺り彼のエッセイでは叙述がわかりにくい)、言語使用の模範として古典的作品の必要性をあげている。文芸作品を異言語教育に用いるのはロシアの РКИ の特徴であるが(参照:小林 2006)、非人文系のトゥルヒーン氏をして古典的文学作品に向かわせるのはロシアの言語教育のあり方なのかもしれない。つまり、母語話者にとってであれ非母語話者にとってであれ、ロシア語学習の目的が凡人には書くことができない優れたテキストに触れること、あるいはロシア語学習とは優れたテキストから言語知識を得ることだ、と言うのであろう<sup>3</sup>。

ともかく母語話者教員が非母語学習者に自信をもって薦められる作家なり作品なりを持っているのは心強い。トゥルヒーン氏の場合、それはツルゲーネフ(Тургенев И.С. 1818-83)であった。ヴィノクル(Винокур Г.О.1896-1947)が「クラシックなる者と呼び得るのは一人ツルゲーネフのみである」とした作家である<sup>4</sup>。ただし幾つかの疑問は直ちに浮かぶ。人によって薦める作家は違うのではないか、時代やニーズに合わないのではないか、ルシストになろうという学習者にとってならともかく一般の学習者にはツルゲーネフではないのではないか、といったものである。自国人が好きな作家と、外人にとって薦められる作家は違う。漱石は日本語が分からないと面白くなく、また日本語が出来るようになればなるほど味が出てくるようで(水村美苗による)<sup>5</sup>、日本学者を志す非日本語話者には薦めたいものであるが、全ての日本語学習者に強要できるものではない。面白く、言語的にもしっかりしていて、地の文とそのまま覚えても実地で使えるような適度な会話文があるテキストを示すのは難しいのである<sup>6</sup>。また、学習に必要なテキストは文学作品だけではない。

<sup>3</sup> この辺りは水村美苗の記述を想起させる。少女であった彼女がアメリカに渡った時、いまだ英語を身につけていなかったゆえに彼女は「ダム・クラス(dumb class)」に入れられた。この言葉ができない「お馬鹿さんのクラス」で用いられていたテキストは、「誰が書いたともわからぬ、生徒たちと同じ年ぐらいの主人公が生徒たちと同じような日常生活を送っている物語——しかも生徒たちが理解できる文章で綴られた物語だけが入っている教科書であった——」(水村 2008:316)。もちろん、彼女はこのようなテキストでは真の意味の言語学習は出来ないとしているのである。

<sup>4</sup> 「19世紀で最も重要なロシア散文家の4人、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、レフ・トルストイ、ドストエフスキーのうち[……]クラシックなる者と呼び得るのは一人ツルゲーネフのみである。クラシックなる者とは、手本となるパロールを彼に就いて学ぶべき作家であり、その作品は、その社会環境の中に存在している実際の言語的理想形を最も完全に具現したものである。かくして、言語学的嗜好の歴史は、社会的教導的、実際の教育的に応用される。」(ヴィノクル 2001: 51)。

<sup>5</sup> 「日本語を読む外国人のあいだでの漱石の評価は高い。よく日本語を読む人のあいだでほど高い。だが、日本語を読めない外国人のあいだで漱石はまったく評価されていない。」(水村 2008: 264)

<sup>6</sup> 日本人ロシア語教師が何かのはずみでロシア人に日本語を教えることがあるかもしれない。そうでなくても日本語学習にどの作家が相応しいか訊かれることは十分ありうる。ロシアで売れているという村上春樹とでも答えて、安心させてやれば良いのだろうか。

トゥルヒーン氏自身も「現代文学や新聞・雑誌，ラジオ・テレビの講読・視聴」の必要を認めている．必要なのはバランスである．

以上のようにトゥルヒーン氏の指摘するところに疑義は浮かんでも特に批判すべきことはない．とはいえ，日本におけるロシア語教育やロシア人教員と日本人教員との協働を考えると彼の言うことを全て受け入れることはできない．彼のエッセイで日本の教育状況が完全に踏まえられているわけでもないのは当然である（そもそも，状況調査は日本ロシア文学会ロシア語教育委員会ですら取りかかることができていない）．彼がロシア語教育研究の専門家ではないとか，先行研究や研究動向に通じていないというのもその通りである．教育を考えるに当たっては，学習者や教授者，そしてその社会的文脈を考えねばならないであろうが，全てがきちんと踏まえられているわけではないことも然り．だがそれらを割り引いて彼の指摘の正当性を救いだそうとしても，日本人教師としては幾つかの論点を指摘せざるをえない．

第1点は，トゥルヒーン氏の想定する学習者は，完全なロシア語の習得を目指す者である，ということである．学習者には能力的，時間的，金銭的なリソースを持って学習に望むが，無限にリソースがあるわけではない．また誰もがロシア語学習のみに多くのリソースを注げられるわけではない．ロシア語学習は学習者の学びのごく一部である．また，完全なロシア語習得を目指す必要があるのか，という問題もある．これは大学教育の中で外国語という科目をどう位置づけるかという問題でもある．専攻課程に於いてならばトゥルヒーン氏の指摘は正しいだろう．そしてネイティブのロシア人としては，ロシア語が世界のコミュニケーションで必要な言語と思っているのだろう．だが，それは日本に於いては必ずしも自明ではない．（ロシア語学習のために何かは確実に犠牲になるがそこまでして）本当にロシア語を習う必要があるのか，そしてロシア人は本当に日本人にロシア語の知識を求めているのか，という問題は常に残るのである．もちろん我々はロシア語の知識が様々な可能性を与えてくれることを知っているし，日々の実践に於いて目前の学習者のために全力を尽くし，自身もロシア語学習・ロシア研究を続けるのであるが，日本人教師までがロシア人と同じメンタリティとなって良いわけではあるまい．日本のロシア語教育の社会的・歴史的な文脈と教育現場をきちんと踏まえ，日本人がロシア語を学ぶということはどういうことかを自覚し，内省しつつ教育にあたらなくてはならないであろう．それが日本人教師の責任である．

2点目は，完全なロシア語を目指さないとするとすれば，どのようなロシア語が必要なのか，をイメージしておくことが必要だろう，ということである．不十分で良いからコミュニケーションのためのロシア語といってもそれが一概には規定できない．言語能力といっても生活言語能力(BICS)，学習言語能力(CALP)は違う．いちおう二つの言語能力共通の基礎があると想定し，その standards なり習得基準を模索することができるが，学習者

の資質は多様なので策定は難しい。

3点目は協働の現実的かつ技術的な問題。筆者はかつて、日本人教員とロシア人教員の役割分担として、「非母語話者教師は文法演習とテキスト講読を中心とし、会話練習や当該言語での自己表現訓練はネイティブ教師に任せる」（小林 2006:22）とし、これは敢えて言い立てるほどでもないほど正当だと信じるが、役割分担・協働はこれだけで済む話だけでもない。教材作成・準備の際にネイティブ教員に文体・コノテーションのことを解説してもらうのは当然である。文法演習をロシア人教師が担当することもあるし、会話練習を日本人教師が担当することもある。文法学習の際には非コミュニケーションな学習が効率が良いことがあるし、授業で学習者に動機付けや達成感を与えるには、コミュニケーションな要素がなにがしか必要であろう。「幸福なロシア語体験」を与えるために、文法的には易しいが表現としてはどことなく不足感がある（他にもっとよく使う表現があるような）ものを使ってもらうこともある<sup>7</sup>。この辺りをロシア人教員（特に日本の現場に通じていない非専門家）に知ってもらう必要がある。

以上を補いつつまとめてみよう。

- ・ロシア人教師はインテリゆえに学習者に完全なロシア語への努力を求めがちである。そのような態度は頼もしいが、日本人教師としては現状把握と学習の意味も含めより自覚的になければならないし、その認識にもとづいて教育を主導する必要がある。
- ・日本におけるロシア語教育では「幸福なロシア語体験」を与えるだけで良しとする、否、それを目的とすることがありうる。その場合、ロシア語への傾注をひたすら求めるロシア人教師の意に背くことになりうる。フラストレーションがたまらぬように、日本人教師がロシア人教師に説明する必要がある。
- ・ロシア語専攻課程の学習者にとってはその目標はロシア人教師が求めるものと一致するだろうが、乗り越えなければならないことは多いことを共通認識とすべきである。

ロシア人教師のすぐれた教養を活かしつつ、学習者に過度の負担をかけず、学習者にも教授者にも手応えを感じさせ、幸せなひとときを得さしめる、日本人教師の役割は大きい。

なお、本章で取り上げたような、言語教育を専門としているわけではないがロシア語教育に従事しているロシア人は日本にもそれなりにいる。また、ロシア語教育を学んだことがないがロシア語を教えている日本人教員もいる。そうした教員間を結ぶネットワーク作りと教育界全体の向上が必要である。もっとも、こうした事業をたとえば日本ロシア文学会（ロシア語教育委員会）なり日本ロシア語教育研究会なりが担当するのか、あるいは北大スラブ研究センターといった既存施設が中心となって進めるのか、あるいは科研費等で

<sup>7</sup> 授業を当該言語の「学習の場」ではなく「体験の場」と位置づける考え方である。ロシア語教育に関しては特に名付けられているわけではないが八島（2000）に認めることができる。また、フランス語やドイツ語の教育では「イミディアット・メソッド」として練り上げられている（参照：池澤 2004）。

の企画とするのか、それぞれの得失や「行政的」な問題、人的リソースの問題もあって、にわかに判断できない。今後の課題として指摘するにとどめる。

## 文献

- 池澤明子. 2004. 「イミディアット・メソッド概説」『Conversation dans la classe AVANCEE-Faux-debutants 教師用指導書』<http://www.immediate-method.com/articles.html> [2011年2月28日閲覧確認]
- ヴィノクール Г.О. 2001. 「文学作品の言語の研究について」(小林潔訳) “Travaux du Cercle linguistique de Waseda”, Vol.5, pp.39-83.
- 小林潔. 2006. 「『外国語としてのロシア語』が目指すもの——『機能・コミュニケーション文法』と『文学テキストの重視』——」, 『外国語教育論集』(筑波大学外国語センター) 第28号, pp.15-24.
- シチュエルバ J.I.B. 2008. 「導入コースの意義」(小林潔訳) 堤正典・匹田剛編『ロシア語学と言語教育Ⅱ』(東京外国語大学, 2008年), pp.29-41.
- 水村美苗. 2008. 『日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』. 筑摩書房.
- 望月正道. 2008. 「『語彙力』とは何か」“Teaching English Now”(三省堂), Vol.11, pp.2-5.
- 八島雅彦. 2000. 「語学教育における全体性の問題——『話すロシア語入門の1年』——」. 『スラヴィアーナ』(東京外国語大学スラブ系言語・文化研究会) 2000年特集号, pp.15-21.

ロシア語母語話者のある教育観 協働をいかにすすめるか  
—— トウルヒーン論文に寄せて ——

小林 潔

**К опыту преподавания русского языка в Японии:  
проблемы и перспективы обучения.**

Трухин М.А.

日本に於けるロシア語教育にあたってはロシア人教員と日本人教員との協働が必要である。そして、ロシア語教育を専門としないが教壇に立つ母語話者も存在する。ここに示すのは、日本でのロシア語教育経験を有するそのような母語話者の教育観である。

- ・日本人学習者が出会す困難さの提示・分析（発音，語彙，文法ど）
- ・インターネットスラングへの教育での配慮
- ・標準語を学ぶ上でのインターネット利用の制限や慎重な利用
- ・〔文学作品，特に〕 ツルゲーネフ作品の利用

日本人教員はこういった見解をもわきまえ，かつ，日本の教育現場の文脈とロシア語学習の意義の認識を踏まえ，より良い協働を目指すべきである。